

#6

「表現未満、」を 広げる

のヴァてれば、ウェブサイト、
スタッフのコラム

福祉の現場は、人と人が日々関わる中で、出来事や問いや葛藤が生まれてくるところ。それを個人の中だけに留めず、共有すること、深めること、多くの視点から捉えなおす機会を設けるのが、前各項で述べられてきた、文化事業の数々である。しかし、文化事業での取り組みを公に発信しようとすればするほど、我々が「表現未満、」と呼ぶところの根っこ、つまり日々のこと、個人の思考や葛藤がこぼれ落ちてしまいがちになる。ここで生活しているひとたちが、何を考えて、なぜそうしているのか。そんな“日常”を伝えるために、広報誌や動画を制作したり、ウェブサイトやSNSで発信したりと、改めてコンテンツ整理・稼働に取り組むことになった次第である。

広報 年間スケジュール

日付	できごと
5月1日	広報チーム 発足
5月24日	のヴぁてれび新コンテンツ「のヴぁてれびと○○」第一弾 配信
5月27日	ホームページトップ画面リニューアル 発表 全体リニューアルに向けて動き出す
5月31日	たけし文化センターMail NEWS 5月号 配信
6月26日	たけし文化センターMail NEWS 6月号 配信
7月18日	たけし文化センターMail NEWS 7月号 配信
8月5日	【号外】たけし文化センターMail NEWS 凸凹祭り情報 配信
9月1日	のヴぁてれび新コンテンツ「アルス・ノヴァCLIP！」配信開始 (以下週1ペースで配信)
9月6日	たけし文化センターMail NEWS 8月号 配信
9月28日	たけし文化センターMail NEWS 9月号 配信
10月1日	月刊誌10月号 発行
10月18日	ホームページ デザイン案 決定 開発開始
10月25日	たけし文化センターMail NEWS 10月号 配信
11月1日	月刊誌11月号 発行
12月1日	たけし文化センターMail NEWS 11月号 配信 月刊誌12月号 発行
12月22日	【号外】たけし文化センターMail NEWS 新春イベント情報 配信
12月26日	たけし文化センターMail NEWS 12月号 配信
1月4日	月刊誌1月号 発行
1月30日	たけし文化センターMail NEWS 1月号 配信
2月1日	月刊誌2月号 発行
4月	ホームページリニューアル完成予定







認定 NPO 法人クリエイティブサポートレッツがお送りする、インクルーシブ・メディア「のヴぁてれび（動画配信チャンネル）」は長年、就労継続支援 B 型の仕事のひとつとして運営されてきた。しかし、2 年ほど前から撮影・編集を担ってきたクルー（利用者さん）の卒業や仕事の変更が相次ぎ、就 B メニューとしての役割がほとんど形骸化。その存在理由を改めて考え直すこととなった。

時を同じくして広報チームが発足。レッツという、何においても「一言」で表すのが困難な団体の「広報」を見直すという挑戦の中に「のヴぁてれび」は、コンテンツのひとつとして参加することとなった。

果たして「のヴぁてれび」とは何なのか？ 終わらない問いを抱きながら、「のヴぁてれび」の動画配信は続く。

YouTubeチャンネル「のヴぁてれび」

<https://www.youtube.com/channel/UCG-34arDueJ9Yep6vIYg8Mw>



動画紹介

①『週刊あるす・のヴぁ』

撮影・編集のヴぁてれびクルーによる総本数 200 本を越えるシリーズ番組アルス・ノヴァの歴史はここにあり。

②『アルス・ノヴァ CLIP!』

アルス・ノヴァの全スタッフがスタッフ間でのみ共有していた有象無象の動画たち。そんな秘蔵動画をまとめて大放し！

③『のヴぁゲーム暮らし（仮）』

のヴぁてれびと何かを掛け合わせて化学反応を楽しむ『のヴぁてれびと〇〇〇』シリーズ 第一弾。利用者さんのゲームプレイ画面を見ながら、スタッフ渡邊と（アルス・ノヴァとは全く関係のない）友人のよっしーが、わちゃわちゃとゲーム話に花を咲かせる動画。



④『ヘルパーのかばんの中身 紹介しちゃうよ!』

動画配信サイトでよく見かける荷物のパッキング動画をスタッフ塚本が念願のパロディ化。アルス・ノヴァ ULTRA で宿泊勤務するヘルパーさんの荷物を大公開!

⑤『アルスデイズ』

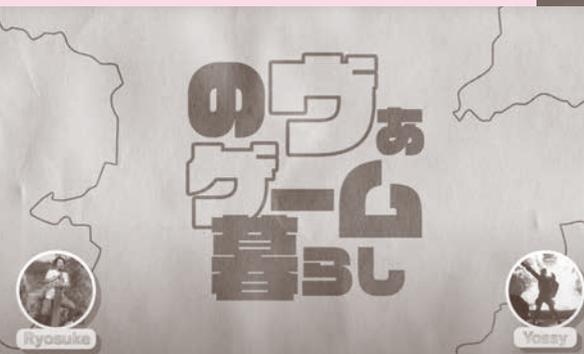
アルス・ノヴァの日常に流れる、とある1日のなんとも言いようのない時間をちら見せ☆人気コンテンツ『アルス・ノヴァ 60 秒劇場』が 60 秒の枠を越えて、装い新たに生まれ変わりました!



『週刊あるまのヴァ』



『アルス・ノヴァ CLIP!』



『のヴァゲーム暮らし(仮)』



『ヘルパーのかばんの中身 紹介しちゃうよ!』

レッツのホームページは、事業内容の増加に伴いページ数やコンテンツ数が増え、雑然として秩序を失ってしまっていた。サイトを見て「クリエイティブサポートレッツ」がどういうことをしている法人なのかがわかりにくい。今年度の事業について知ってもらいたくても、事業ごとに SNS や関連サイトが増え、整理ができておらず、メディアをうまく使えていないと感じていた。しかし、ホームページから垣間見えるカオスな部分（「変」なところ）を面白いと感じているスタッフや外部の声も多く、その点に留意しながらプロジェクトを進めた。

また、コンテンツ整理を行い、停滞していた SNS を再稼働。事業やイベントのお知らせだけでなく、日々の出来事をコラムに起こして発信した。不定期だったメールニュースも毎月配信を行い、「レッツで今起きていること」が定期的に伝えられるよう努めた。ウェブ上を整備することで遠くの人には届けやすくなったが、近くのひとには別の工夫が必要だった。建物の前を通り過ぎるけれど何をやっているところなのか知らない、というご近所さんは多く、また利用者のご家族やスタッフでさえ、今レッツのどこで何が起きているのか掴みきれない、ということがしばしばあった。ひとつまとまった形のものを発行・保存していく必要がある。そこでメールニュースの内容と、日々のささやかな予定が盛り込ま

れたイベントカレンダーを紙媒体に落とし込んだ広報誌を作成し、地域や関係者といった顔の見える相手に配布した。

団体立ち上げから 23 年、ついに（ようやく）広報チームが発足した。内容が多岐にわたるので、我々もよく存在目的を見失う。その度に行われてきた会議の議事録を見てみよう。

スタッフや利用者、個人のことをうまく出していきたい／支援を考えるために、広報について考えることが必要ではないか／動画会ができればいい。日々のことを話し合う機会になる／仕事とプライベートの狭間で、話せる機会がくれたら／利用者のことばかり言わない。スタッフとの関係から生まれたものを発信できるといい、それがレッツらしさなのではないかと思う／出来事よりも、なにを考えているのかということ。

わたしたちが、日々、なにを目撃して、なにを考え、どう行動したのか。それを受け取ったあなたが、なにを思うのか。広報とは、わたしとあなたを繋ぐ橋である。



2023年春
ウェブサイトのトップ
ページをリニューアル
(2022年度事業)

2023年度はサイト全体の
リニューアル作業に引
続き着手した



広報誌



#6 「表現未満、」を広げる

スタッフの日常 コラム

column

個々の視点や思考を発信したいという考えから、様々な機会にスタッフへのコラム執筆を呼びかけている。日々のこと、出かけ先でのこと、普段考えていることなど、複数のスタッフに執筆してもらい、既存のブログやSNSに随時掲載してきた。文体にも個性がにじみ出ており、スタッフが書いたものはできるだけ原文のまま載せるよう努めている。ここでは掲載済みのコラムの一部を紹介する。



ULTRA誕生前夜 その1

どうも～、レッツのヘルパー事業部アルス・ノヴァ ULTRA のさまよえるチーフ、ササキです。 ぼくがいまのようにパーソナルアシスタンス* 的な支援を志向するようになったのは、その「種」となったようなできごとがいくつかある。折にふれて、話してきたつもりだけど、ちゃんと形に残したことはなかったかと、先日人と話していて気付いたので、そのうちのひとつのことを今日は書こうと思います。

それは2017年のはじめ、レッツが浜松の街なかで期間限定のオルタナティブスペースを開いた〈「表現未満、」実験室〉でのことでした。実験室で開催されたとあるトークイベントの客席に、たけさんこと久保田壮さんが介助者とともにいました。正確には、観客ではあるけれど、客席もスピーカーの座る席も縦横無尽に動きまわっていた。もちろん、いつものように入れ物の石を鳴らしながら。そのときたけさんの介助者をしていたのは、ヘルパー事業所ぴあねっと浜松の吉田さん。ぼくはトークの内容もそっちのけに、吉田さんとたけさんの織りなすセッションに完全に魅了されていた。たけさんが一参加者として、そこにいる。そのことを吉田さんは絶妙なさじ加減で介添えしていたのだ。

記憶をたどって、具体的に描写してみよう。たけさんは基本的にひとつところに留まることをしないで一人で好きに動いている。吉田さんはそれを離れたところから、自身も一観客のような佇まいで、見守っている。スピーカーに向けられる他の人の視線を、たけさんの移動がさえぎる。吉田さんは動かない。たけさんが他の参加者に触れて、触れられた人はたけさんが横を通れるように身をかわす。吉田さんはそれを見つ、じっと動かない。そんなとき、たけさんが参加者の鞆にガッと手をかけようとする。すると、吉田さんはサッと動いてたけさんと鞆の間に自分のからだを差しはさむようにいれて、たけさんが鞆を荒らしてしまうことを防ぎ、また離れていく。定期的な水分補給も欠かせない。たけさんの口元から、涎がきらりと光って垂れそうになれば、ささっと近づいて拭きさる。たけさんがちょっと飽きて激しくなってきたら、絶妙にボリュームをコントロールしながら小型のキーボードでメロディを弾いて気分を転換する。たけさんがパフォーマーとして場をかきまわして生まれる混沌があり(そのような仕方で彼は議論に参加している)、けれどそれによって場が壊れきってしまうでもないような線を、たけさんと吉田さんが描いている様は、とてもダ

ンシー(dancy)だった。音楽好きの方には、そのときぼくには吉田さんがたけさんのローディーのように見えたといえ、その感じがより伝わるだろうか。

たけさんとどのような関係を築くのかということだけではなくて、彼と他者がいろいろな関係を築くことを、アシストする。そんな支援のあり方があるんだということを、実感するような出来事だった。

ササキユイチ

* パーソナルアシスタンスとは、障害当事者が主導(「支援を受けた主導」も含む)してアシスタントを育てながら、生活の支援を利用していくこと。



.....



かくかく

7月3日(月)、聖隷クリストファー大学で代表の久保田が講義することになり、アルス・ノヴァのメンバーたちも遊びに行きました。メンバーの亮賀さんは、講義室でもルーティーンの書き取り活動(通称:おだゆいど)に取り組んでいました。その場に立ち会ったスタッフ・佐藤の記録を掲載します。

久保田さんの講義の中、亮賀くんが学生に交じって「かくかく」。いつものように熱烈に書く!書く!書く!書いた傑作をそばの学生に渡す。「これ、芸術です。」戸惑いながらも笑顔で受け取る学生。「後ろに回して下さ

成立を過去把持と未来予持によって規定したことは有名だ。しかし、一つ目の拍子に引き続いて二つ目の拍子がやってくる、ということが果たして本当に知覚の普遍的なあり方であるのかということは疑わしい。なぜなら、わたしたちは知覚したものの維持の長さに長短があるとはいえ、常に忘れていくのだし、またしばしば過去から離れられないものだからだ)をしているかもしれないし、そもそも何も聴こえていないかもしれないからだ。しかし、ともかくわたしたちは「一緒に音を出している」という同時性だけは共有していて、それは決して互いに無関係に音を出しているということではない。

相互存在性を当然の前提とし、その中で仮初の「個」としての「わたし」を基体としているとき、わたしたちは意識上に捉えられるもの以外のものの作用を感じられなくなってしまう。しかし、ザ・羊のクロニクルズ(旧・羊のクロニクルズ)の演奏は、この「意識上に捉えられるもの以外のもの」を前提としているのだ。

話を戻そう。ザ・羊のクロニクルズの演奏は、同行した観光客や道行く通行人の目にどのように映り、またその耳にどのように響いたのだろうか？

それは恐らく、「奇妙なもの」として捉えられたに違いない。羊のクロニクルズの音楽体験は、聴く人を一般的な音楽の聴き方に安住させない。それは人をそわそわさせ、居心地を悪くし、場合によっては怒りすら喚起させるかもしれない。しかし、そういった意識上に感じられる「理解(または「わからない」という形で同定すること)」の埒外に、わたしたちが提供する音楽体験はある。

羊のクロニクルズの頭に付けられた「ザ(The)」の語は、そういった同定/特定されざるものを、「同定/特定されざるもの」として同定する、といった意味なのだろうか。断じてそうではない。それは、意識の埒外にあるものの存在を、そのままの姿で感じ取り、一般的には決して同定/特定されたものとしての「ザ(The)」が付かないはずものに、「ザ(The)」を付けることだ。すなわち、それは一般に存在しないと思われるものに存在証明を与えることなのだ。

そういった視点から聴くならば、「ザ・羊のクロニクルズ」の演奏は、決して「奇妙なもの」とは言い得ない。とはいえ、それを特定するための言葉もない。その体験を言い尽くそうと思うならば、膨大な遠回りによる言語を必要とするだろう(例えば、ブルーノの『失われた時を求めて』のように)。しかし、本来、体験とはそういったものなのだ。

ともかくにも「ザ・羊のクロニクルズ」の新たな活動は幕を開けた。今後、それがどういった形に発展していくのかはわからない。きっと面白いことが起こるに違いない。あえて注目してもらう必要はない。見かけたら目を逸らしてくれても構わない。しかし、それでも「ザ・羊のクロニクルズ」の音楽体験は、あなたに何かを伝えるだろう。

曾布川祐

「ザ・羊のクロニクルズ」instagram

<https://www.instagram.com/reel/C2TuPV6PuaJ/>

?igsh=NTc4MTlwNjQ2YQ==



.....



ていちゃんの輪

アルス・ノヴァ屈指の職人、ていちゃん。彼女の最近の日課は、チラシなどの雑誌を短冊に切って、テープで留めて輪っかにするという、「輪っかづくり」。素早くて正確に手作業をこなすことができるていちゃんは、しかし一時期、その手捌きでもって、たけぶんの床材を剥がすことに情熱を注いでいました。このままではたけぶんの床が丸裸になってしまう……!しかし、誰も見ていない一瞬のスキにササッと剥がすその匠の業、

何か別のことに転じることはできないだろうか!? そうして、日々スタッフたちと関わる中、いつしか始まった「輪っかづくり」。今ではていちゃん、床なんてそっちのけで「紙切る!」「テープ切る!」と生き生き輪っかを連ねています。



こちらの写真はていちゃんと、10月に行われた「凸凹祭り」会場で、ていちゃんの作った「輪っか」を使ったオブジェの最終調整をしているところです。時折一歩引いてオブジェを見つめながら輪っかをつなげていく姿は生花の先生のようなようだった。

この輪っか作りを始めて半年くらい経ちますが、個人的な体感としては2～3年経っているように感じるほど、安定して一日3～4時間、毎日のように作っている。

ボール遊びや楽器演奏、散歩、計算ドリルや絵画、コラージュ作りなどの様々な日中の過ごし方の模索の末に立ち現れたのが、この「輪っか」作り。パート職員さんの遊び心が発端だったと記憶しています。

今となっては前が見えないほどに連なり、「レッツの映えスポットランキング〜!!」があるのなら、必ず上位に



食い込んでいるはずで。



↑「おしゃれな生き方情報誌〜粋な過ごし最前線〜」の中から抜粋

まだていちゃんに関わったことの無いスタッフに、ていちゃんの日中の過ごし方を伝える時、つい、注意事項を中心に話してしまう自分に悲しくなると、輪っか作りの手順などが書かれた、誰でもすぐに関われるような備忘録が必要だなと思ったので、ていちゃんの魅力の一端を伝え、共有できるような願いも込めて冊子を作った。各スタッフの「思い」が確実にていちゃんの「過ごし」を豊かにしていると感じているので、今後はこの号では網羅出来なかった、ていちゃんの魅力と共に、スタッフ個々の支援や方針なども伝えられるようなものにしていきたい。

尾張美途



アルス・ノヴァ出張カットの日

出張カットーそれはたけし文化センターに浜松の美容院さんが出張で来てくれ、アルス・ノヴァのメンバーの髪を切ってくれる日です。遡ること2021年ごろのある日、スタッフのひとりがオシャレ雑誌を持ってきて、「みんなどんな髪型が似合うと思う?」と。しばしスタッフであっだこうだと言いつつ、いろんな髪型の画像を出したりした記憶があります。

いつもの髪型もいいけれど、家庭で散髪に連れて行き髪を切るのも一苦労、みたいな場合もあったり、本人の過ごしやすさなどでアルスでは男性は坊主が多いのも事実。そもそも本人たちはどんな髪型がいいと思っているの…!?

と、まあ関係する人々が「こんな髪型が似合うんじゃない?」とか、「人生でちょっと意外な髪型にチャレンジしてみやした…!」という機会があってもいいはず。…というわけで美容室の方に頼んで、定期的に希望があるメンバーの散髪をアルス・ノヴァで行っています。

今流行りのツーブロックのあの人やこの人を見ることになるなんて…と新鮮~!な場面も。

そんな出張カットも根付いてきたある時、カットメンバーの1人、アルス・ノヴァのロックボーカリスト兼コーヒー屋の大ちゃんが車椅子です…とわたしに近づいてきて、「僕さあ、前髪伸ばして亮介さん(スタッフ)みたいになりたいんよね…」とボソリ。強い意志はあるけれど、照れ屋で引っ込み思案なところもありそんなに自分の気持ちをはっきり口にしない大ちゃんが!そんな気持ちがあったなんて!となんだかビックリ&ホックリしました。髪質とかだいたい違う気がするが…なんてことは理想の前には投げ捨て、「次はガルボさん(美容室)にそれ言おうよ!」と盛り上がり、スタッフ・亮介さんもなんだか照れくさそうに、いい感じのヘアオイルを塗ってあげてました。ご満悦の大ちゃん。今も「もっと髪を伸ばす!」と息巻いています。

自分が当たり前のように行っている散髪という行為も生きる上での「選択」のひとつ。障害の、特に重度知的の人々はそんなみんなが当たり前のようにしてる選択やその多様さが難しいことが多々あります。どんな髪型にするか?今晚のおかずは?どんな服を着たいか?

坊主がいいのかツーブロックがいいのか、彼らは言葉を発しないので結局のところは分かりません。

しかし、アルス・ノヴァ、そしてレッツは、様々な事情で狭まってしまいがちな彼らの選択肢をなんかひとつでも増やすような、そして本人も含め周囲の様々な人々によって彼らについて話し合えるような活動を日々行なっている、いれたらいいなあとはわたくしは思っています。

なんか真面目になっちゃいましたが、散髪した後のみんなの写真を見て

たら「いい顔してるな~」と思い、ここに記しました。

高木路子



.....



イカソーメン・ダブル

舞さんは、毎週火曜に近所のスーパーで昼食を買う。予算は800円。本人にとって見通しが立つことが、かなり重要なので回数を重ねていくと定番メニューが決まっていく。最近、イカソーメンと刺身用サーモン(サク)とペットボトルのお茶が定番化していたが、その平穩を許さないのが「グラム売り」のサーモンだ。

重さによって値段が変わるので、予算内に収まるサーモンと収まらないサーモンが出てくる。しかも、最近値上がりしているのか高いサーモンばかりで、予算内に収まるのは小さくペラペラなものばかり。舞さんは、サーモンに食べ応えを求めていて(?)サクのまま食べるので、ペラペラのサーモンに用はない。サーモンを諦め、別のものを選ぶことになるのだが、見通しが立たないので時間が経つほどにイライラが増えていく。

チーズ、細巻き、天井、カップ麺、パン、ケーキ、韓国のり…いろいろ見るが、じっくり来る組み合わせが、なかなか決まらない。どんどんヒートアップして、スーパー中が注目する大声が響き渡ることもあった。

この日もスーパーに向かう道中から「イカソーメン買う」「サーモン買え

る?』と何度も確認。まずイカソーメンを手に取り、続いて隣のサーモンへ。「これがいい!」「これは?」と手を取る商品は予算オーバーのものばかり。買えるものを伝え、しばらく考えてから「サーモンやめた」。今日もメニューに迷走し、スーパー内を大声で彷徨うことになるのかと暗い気持ちになったとき、舞さんから想定外の一言が。

「イカソーメンもうひとつ買う。」

これまでなかった新しいパターンに、その手があったかと感心した。冷静に考えると全然感心するようなアイデアではない、むしろ偏食の舞さんが思いついて当然の考えなのだが、そのときは買い物平和に終わられる安堵感から「ナイスアイデア!」と覚えてしまったのだ。

次回からはイカソーメン2つが定番になるのか、それとも諦めずにサーモンの品定めを続けるのか。食欲と懐事情(実は、あと「質感」もある)に真剣に向き合う買い物は、まだまだ続きそうだ。

ちなみに、スーパーに出かけるときに舞さんが最初にする質問がこちら。

「うなぎ買える?」(うなぎはいつも予算オーバー)

高林洋臣



